

## 「羅生門」 僻見

### 堀 部 功 夫

さらに芥川は主人公を「大きな面砲を気に」する人と書く。この付加も前記の改変に劣らず重要であろう。

〔面砲〕については、主人公の年齢を示すとの注がすでにある。

〔秋の暮方、羅生門の下。一人の男〕 下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面砲を気にしながら、ほんやり、雨のふるのを眺めてゐるのである。〔かれは餓死か盗人になるかの岐路に居る。〕

原典『今昔物語集』「羅城門登上層見死人盗人語」の「撰津の国

辺より盜せむが為に京に上げる男」を、芥川龍之介<sup>①</sup>は書き換えた。

① 撰津辺より上洛を、〈京都の町〉で〈永年、使はれてゐた主人から、暇を出された〉に、② 盗人になる決断済みを、〈行き所がなく、途方にくれてゐた〉に、改変した。ここに芥川の最初の独創があつたのはいうまでもなく、それは小説の主題を左右する重要な条件であつた（三好行雄<sup>②</sup>）。

動くまい。ただこれだけの理由なら〔面砲〕を一度描けば済む。作品ではこのあと

○ 〔略〕楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持った面砲のある頬である。下人は〔略〕

○ 下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさへ

ながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論 右の手で、赤く頬に膿を持た大きな面砲を気にしながら、聞いてゐるのである。(略)

○ 老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな声で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に、右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみ(略)

と(面砲)をくりかえず。

この(面砲)を宇野浩二が小説進行係の(小道具)と言つたのは有名だが、それより以前、波多野完治がライトモチーフと認めていた。波多野説は、今日顧みられていない。保坂宗重より(ニキビそのものは、この小説の内容そのものと必然的な関係をもっているとは思われない)と否定されている。しかし、下人が盗人になる(勇気が出ずにゐた)間は(面砲を気にし)、決断を下したところで(手を面砲から離)す。下人の精神状態と密接不可分であり十分検討に値する。

(面砲を気にし)を、(劣等感(寺村滋)<sup>7</sup>・(過去の文化や習慣によつて植えつけられた自意識(森常治)<sup>8</sup>・下人に(残っている虚栄心、したがって人間らしさ(悪魔的でないもの)(川崎寿彦)<sup>9</sup>)と解く論がすであつた。

(これらは(下人の臆病な性格を示す)(石割透)<sup>10</sup>(面砲を気にし)

の有機的説明になる。「面砲」は下人自身である(大平和男)<sup>11</sup>式の朦朧解よりピントがあう。

私(虚栄心)解に啓発された。もつとも森・川崎をふくめ先学が下人を(世間体)熟知の健常者視する前提は、後述のように採らないけれども。

## 二

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目にか、る惧のない、一晩楽にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明さうと思つたからである。すると、幸門の上の楼へ上る、幅の広い、之も丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人は、そこで腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

右場面につき、笹淵友一・首藤基澄の論争があつた。笹淵は下人が(仕事にありつく)ため(たとい眠っている間でも、その存在が他人の目にふれることで、万一の僥倖を期待する)はずなのに、どのように描かれていないから、リアリティを欠く、という。一方、首藤は下人が楼上へ上るのを(当然の保身の行為)とし(無防備な寝姿は人目に晒したくないと思うのが普通である)う。死骸よりも人

目を怖れる、それが乱世を生きる人間の心理である」と反論する。<sup>⑬</sup>

作中、羅生門は〈盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門の上へ持つて来て、棄て、行くと云ふ習慣さへ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪るがつて、この門の近所へは、足ぶみをしない事になつてしまつたのである〉と描かれていた。だから、〈盗人が棲む〉ところへ赴くことを〈当然の保身の行為〉<sup>⑭</sup>と言えまい。下人は〈上なら、人があたにしても、どうせ死人ばかり〉と、〈盗人〉を考えていないから外すとしても、〈誰でも〉足ぶみしないところへ近寄るのを自然な行為とみることはできない。

とはいえ、ここで芥川が〈人間の心理のリアリテイについては完全に洞察を欠いている〉<sup>⑮</sup>とみる笹淵説にも組みしがたい。

「羅生門」はおそらく完全無欠な作品ではない。としても、欠陥指摘は伝家の宝刀、万策尽きての最終案とすべきであろう。〈どう考えても問題群が解決されないと証明されたときに、初めて作品の未熟を指摘すべきなのである〉という須田千里の原則に私は従う。

そもそも先学は圧倒的に下人を普通・平凡の人と前提して論を立てている。〈普通の市民〉(長野骨)<sup>⑯</sup>・〈平凡な下人〉(浮橋康彦)<sup>⑰</sup>・〈下人は、普通の、平凡な、若者である〉(檜垣良夫)<sup>⑱</sup>・〈ごく平凡で、日常的〉(覚井靖夫)<sup>⑲</sup>・〈ごくふつうの人〉(永井豪)<sup>⑳</sup>・〈ごく当

り前の青年〉(田中実)<sup>㉑</sup>等。この他、明示しない大方の論者も同前提であろう。

これは、下人の心理が誰にでも共感可能に描かれていることを証すのかもしれない。

しかし、素朴に本文前引場面を読めば、下人を普通の人とみた印象は覆る。教科書で読んだ高校生が〈下人は死体と一緒に寝ようとしたのか、もしそうだとしたら、そこからして下人の人間性がおかしいんじゃないか〉<sup>㉒</sup>・〈自分が仮に下人だとしたら、あんな不気味な羅生門へは行きません〉<sup>㉓</sup>むね発言したとおり。

たしかに〈死人ばかり〉の楼上を〈楽にねられそうな所〉とする感覚は、ごく普通・平凡な人のそれとして無理がある。〈この小説においては、主人公の下人が〔略〕通常人とは極めて異質な神経、というより人格を有した人物として設定されていることも無視してはならないと思うのです〉(早瀬輝男)<sup>㉔</sup>。

笹淵・首藤の論点は、

A 楼上へ上る下人の行為が常識的〔○とする〕か否〔×とする〕か、

B 芥川の右描写にリアリティがある〔○とする〕か否〔×とする〕か、で、笹淵はA×B×、首藤はA○B○であった。私は、A×B○説なのである。下人の心を普通人の域を逸脱したと読むから、

常識に沿わない行為の描写もリアリティを損わないと思う。

さて、下人を特異とみたが、その内実をどう考えるか。早瀬の、下人が(多少のことでは動じない、いい方を変えるならば、並の人間にはない肝心を有していた)という解とちがって、むしろ逆で、病的に引込思案な下人を想定する。私は本文の(人目にかゝる惧)を重視したい。決してまなざしを向けてこない死人の方が楽というくらい、生者の(人目)を(惧)れる下人なのである。

二階へ移動場面の原典は(山城の方より人共の数来たる音のしければ、其れに不<sup>な</sup>見えじと思て、門の上層に和ら搔<sup>さわ</sup>つき登たりけるに)であった。この盗人らしい心理を作品は改変した。(人共)を削除し、冒頭来の(この男の外に)(誰もあない)風景とした。

(人目)といつても、それは内面に働く心理的なものである。無人風景は、もちろん廢市平安京を描出する。木村一信は下人存在の(強調表現)だと注意した。下人の(誰)とも異なる特異性の暗示でもあったらしい。

## 二

一見ごく普通だが、実は特異。この下人は「神経衰弱」、今で言う対人恐怖のノイローゼに罹っているのではないか。

対人恐怖については森田療法から多く教ええられる。素人ながら俄

レポートを試みよう。

対人恐怖は、強迫観念研究の中から浮かび上がった。管見に及んだ、明治時代の研究は、(1)呉秀三「強迫観念二就キテ」(明24・12・5『哲学会雑誌』)、(2)呉秀三「強迫的観念ヲ有スル精神病ノ症例」(明25・11・5)12『東京医事新誌』、(3)榊俣「強迫観念ヲ有スル患者ノ実例」(明28・7・20)8・5『東京医学会雑誌』、(4)森田正馬「治癒セル強迫観念狂ノ一例」(明38・2・5『神経学雑誌』)、(5)後藤省吾「恐怖二就テ」(明38・6・5『神経学雑誌』)、(6)田沢秀四郎「強迫観念二就テ」(明40・3・5『神経学雑誌』)である。

一八三九年、フランスで Esquirol が注意し、一八六六年、Falret が疑問病として報じ、一八六七年、Krafft-Ebing が命名した強迫観念の日本症例は後表の通り。

強迫観念の特長を榊俣は(一)強迫観念ヲ有スル患者ノ多数ハ男子ナリ(略)(二)強迫観念ヲ発成シタル年齢ハ九歳以上三十二歳迄ニシテ男女共ニ平均廿一二歳ヲ多トス(略)(三)患者ハ中等以上ノ生活ヲナスモノ多ク、殊ニ紳商、学生ハ準他多キガ如シ。(四)強迫観念ノ内容ニ從テ、其種類ヲ區別スレバ蒙汚恐怖、及ヒ穿鑿症ヲ最トス(略)患者ノ多数ハ合併病ヲ有ス(下略)と集約した。

芥川の知見が、右諸文献に達していた明証は無い。だから、対照

件数							症例報告			症状
	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	反	復	強	
1						1	反	復	強	迫
5				5			穿	潔	鑿	症
11		3		7	1		不	場	恐	怖
2		1		1			広	団	恐	怖
1				1			集	病	恐	怖
6		3		3			疾	字	恐	怖
2				2			語		恐	怖
1				1			火		恐	怖
1		1					盜	臭	恐	怖
1				1			体	面	恐	怖
3	3						赤		恐	怖
1			1				尿			意
2		2					〈あ	とれみ一〉	でないの	
							病	起	きられない	
	3	10	1	21	1	1	件			数

に止めるとして、両者の符合点を列挙する。

(一) 症例は男26人・女7人であった。下人も男である。

(二) 症例中発病年齢の示された患者のそれは平均二三歳であった。下人も〈面皰〉で示されるように若者である。

(三) 症例中職業明記の患者の最多は学生であった。下人は〈中等以上ノ生活〉者と言ひ難い。ただしこれをモラトリアムの許される者と換言できるならば、下人を重ねられなくもない。(つよい感情)

襲来時〈面皰〉への言及が消え、また以下に下人の身体的活動エネルギー充滿よりよりうかがえば、餓死の進行が緩慢なためか、なおモラトリアム期を残しているようである。

このような下人の〈余裕〉に先学も着目していた。〈下人は〔略〕必死さを持たず〉(平岡敏夫)・〈心理的余裕〉(笹淵友一)・〈心の余裕や優越感が表われている〉(櫻井雅代)・〈餓死に直面しているような危機感を感じられない〉(大里恭三郎)・〈余裕しやくしやくといったところ〉(関口安義)等。

ただし、右説の多くが〈余裕〉を本文〈面皰を気にし〉と関連させる点は従えず、また平岡がここから下人は〈ぎりぎりの人間としてのリアリティーを持たぬ〉と作品欠陥指摘に進む点も採らない。

(四) 症例中〈赤面恐怖〉の苦悶発作強度は(一)、改マリタル場所、衆人ノ前自家以上ノ人及異性ニ対スル時ハ発作最モ強劇ナリノ二、普通一辺ノ知人ニテ親友ニアラザル人ニ対スル時モ氣遣ヒ多キガ故ニ比較的発作強シノ三、心底ヨリ打明ケタル親友ニ対スル時ハ比較的発作軽ク寧ロ妻ニ対スルヨリモ軽度ナリト云フノ四、自家ノ子女及医師ニ対スル時ハ最モ輕ク殆ント発作ニ關係ナシ殊ニ医ニ対シテ疾病ノ状態ヲ詳説シ其治療ヲ一任セル時ハ精神頗ル安心シテ医ノ面前ニ発作ヲ惹起スルコトナシト云フ(田沢秀四郎)。赤面恐怖の背景に人前でよく見られたい心理がある。

平岡の前記説は下人が（にきびなどをつぶしたりしている）との読みに由来する。が、作品本文に（つぶしたり）はなく、（面砲を気にし）だけである。しかも、四回目の（面砲）個所から、（面砲を気にし）を顕現すれば、ニキビに手をあてる・手で覆う・かくすなどのしぐさが推定できる。下人は（膿を持た大きな面砲）を（人目）にさらさないよう、必死になっているのであって、のほほんと（にきびなどをつぶしたりしている）ではなかった。

（五）症例の多くが（神経衰弱）を合併する。下人も視線恐怖・醜貌恐怖、（人目）を（気に）する地獄に居るわけで、ジロジロ・ヒソヒソに萎縮し堪え兼ねた。（面砲を気にし）続け、人生の次の一歩に踏み出せず、（何時までたつても）（低徊）している。

下人は、その呼称から（主人）との関係で生きてきたことが示されるけれども、おそらくこれまで本格的な世間の荒波に揉まれる経験は無かったのである。ちょうど（いったいこの俺が人生について何を知っているだろう？／もちろん、俺は一見、その中に立ってはいた。／だが、俺は人生をせいぜい頭で分っていたにすぎず／いちどもその中に自分を織りこむこともできず、／我を忘れて、それに身をゆだねることもなかった）と述懐する、ホーフマンスタイル「痴人と死」（富士川英郎訳）の（俺）に近い立場のように。

#### 四

森田正馬<sup>①</sup>は、強迫観念療法として（第一身体的ノ療法〔略〕第二精神療法ハ（一）、素因アル兒童ノ教育ヲ注意シ（二）、精神転導法ハ患者ノ趣味ニヨリ〔略〕（三）、醒覚暗示ハ之ニ言説的ト仮面的トノ二種アリ、甲ハ言語ヲ以テ〔略〕乙ハ無害ノ薬剤其他ヲ籍リテ〔略〕（四）、精神的練習〔略〕（五）、又意志ヲ以テ〔略〕（六）、重キモノハ神経病院ニ監視シテ〔略〕第三、催眠術〔略〕）を挙げる。老婆の台詞がいわば言説的醒覚暗示に、引剝が練習に当たろうか。

「この髪を抜いてな、この女の髪を抜いてな髪かみにせうと思うたのぢや。」〔略〕成程、死人の髪かみの毛を抜くと云ふ事は、悪い事かも知れぬ。しかし、こういう死人まぶの多くは、皆、その位な事を、されてもい、人間ばかりである。現に、自分が今、髪を抜いた女などは、蛇を四寸ばかりづつに切つて干したのを、干魚かほだと云つて、太刀帯たてびの陣まへ売りに行つた。疫病にか、つて死ななかつたなら、今でも売りに行つてゐたかも知れない。〔略〕自分は、この女のした事が悪いとは思はない。しなれば、餓死うをするので仕方がなくした事だからである。だから、又今、自分のしてゐた事も、悪い事とは思はない。これもやはりしなければ、餓死うをするので、仕方がなくする事だからである。さうして、その仕方がない事をよく知つてゐたこの女は、自分のする事を許してくれるのにちがひないと思ふからである。

原典の媼の台詞「己が主にて御ましつる人の、失給へるを繰ふ人の無ければ、此で置奉たる也、其の御髪みかみの長に余て長ければ、其を抜取かきて鬢かみにせむとて抜く也、助け給へ」と作品との相違点は、作者が①世間多数者の生き方の示唆を付加した、②死者を、なんら他人を害せぬ女主人から詐欺を働く行商女に改変した、③行商女も老婆も生活の極限状況にあると付加設定した、④語り手の態度を命乞いから開き直りへ改変した、ことである。わざ／＼相違させた①④に、作者の意図がとくに強くうかがえる。

自分の行為をはじめ「悪い事かも知れぬ」と述べた老婆が数行あとで「悪い事とは思はない」と主張する。原典を改変した①④は、このための条件を揃えるといつてよい。すなわち、

弁解一、世間の（人の多くは、皆）生きるため加害行為をしている。  
 弁解二、被害者も別次元では加害者であった。被害者はこう（されてもい、）人間である。

弁解三、加害者はそれを（しなければ、餓死うまをするので仕方がなく加害する。

弁解四、被害者も（許してくれるのにちがいないと思ふ）。

である。老婆の台詞は、弁解一―四の条件を得て辻褄が合い、（論理的）（石割透）<sup>⑩</sup>となる。

弁解二・三は、明快単純なので説明を略す。

弁解三しか読まぬ人が多い。弁解二・三だけを老婆の理屈として採る先学も居る。

だが弁解一・四も、下人の変化契機として重要だろう。

弁解一は世間普通人のあるがままを示す。（だけれどもがそのような悪をなしているのだ。〔略〕老婆の言葉は、下人の前に、世間の「本来の下等さ」を容赦なくあばき出してみせる）（佐藤正英<sup>⑪</sup>）のであり、（悪が充満し横行しているという世の中のあり方を示すことになる）（清水康次<sup>⑫</sup>）。

神経症は、ある程度なら万人に存する不快状態を、自分だけ特殊の症状ととらえ執着するところから始まる。だから、こんな不快も世間によくあることと受け流して行けば、囚われから脱出できると聞きかじった。

弁解四は、和田繁二郎が（エゴの相互了解の合理性）とふれ、とりわけ三好行雄の提言（老婆が自己の行為に、第三者の「許し」を主張しているのは重要である。〔略〕彼らは）生きるためには仕方がない悪のなかでお互いの悪を許しあつた」という解が有名である。

その後反論が出た。（死んだ女の側からの許しの存在など、どこにも確証がないのみならず、はじめからそんなものは想定されていない）（濱川勝彦<sup>⑬</sup>）。（「羅生門」には「与える」「許す」主体は存在しない）（笹淵友一<sup>⑭</sup>）。（蛇を切り売った女は死んでいるのだから

老婆を許せるはずはないし、それ以前に老婆のような行為を許す意志を示してもいない（小林幸夫）。

三好の（お互いの悪を許しあつた）は（やはりゆきすぎである）

（小林幸夫）。そこをつつこんだ反論であつた。

しかし反論は「産湯とともに赤子を流し」ていないか。現実的許可でなく、加害者側の主観的一方的な思いこみとしてなら（許し）主張は依然成り立つと思う。三好も（老婆は女の行為を咎めないし、それを咎めぬ女が《大目に見てくれる》ことを疑わない）と書いていた。<sup>33</sup>（第三者の「許し」というより、第三者向けの（許し）主張であろう。

第三者向けに（許し）が主張できるとすれば、それは、ここまで（人目）を（惧）れ続けてきた下人に一つの福音だつたはずである。老婆の言説をまなんで、下人は、①自己特別視を止め、②因果応報の理を聞き、③自分もやがては極限状況に至る実態を意識し、④他人の追求をうけても言いぬけてできる範例を得る。

（人目にかゝる惧）が、消えた。ニキビを気にしなくてよくなつた。下人は（不意に、右の手を面砲から離）す。

（下人が盗賊になる物語）（前田愛）<sup>11</sup>に、私は対人恐怖症者の治療物語を重ねようとしている。

「羅生門」が（愉快な小説）<sup>14</sup>かという、先学を悩ませた難問の突

破口も私なりに見付かり、「鼻」への接続もよくなる。

## 五

老婆の弁解と下人の引剝とをいわば順態接続で読む通説も、三好（許し）論に対する反論がたかまるなかで、昨今は揺れている。（下人による老婆の着物引き剥ぎは、老婆の乗っている論理に対する軽蔑と嘲笑をこめて行なわれており、引き剥ぎそれ自体よりも、この侮蔑のほうに実質がある。（略）引き剥ぎは、老婆流論理が不毛であることの見せしめ）にすぎない（高橋陽子）<sup>12</sup>・（彼が老婆からその着物を剥ぎとることによつて彼女の悪を裁くことができ）る（笹淵友一）<sup>13</sup>・（下人は老婆のことばに同感したのでも、まして彼女の論理を取り入れたものでもない。下人は老婆の持ち出した生きるための論理と闘争し、その《反逆の論理》を獲得するのであつた）（関口安義）<sup>15</sup>等、老婆の論理と下人の引剝とをいわば逆態接続で読む説が多いようである。

そこで下人の引剝を検討しよう。

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。

原典（盗人死人の著たる衣と嫗の著たる衣と抜取てある髪とを奪取て）と比べれば、周知のごとく、盗品の品種数量が異なる。原典



の盗品は④死者の衣・⑤嫗の衣・⑥髪、三点であった。作品のそれは⑥相当のものしか盗らない。下人はなぜ④⑤を手にしなかったのか。

このうち④については、浅野洋<sup>③</sup>の明解がある。〈今昔物語〉の死体は老婆の主人筋にあたる身分の高い女性であり、その着衣の商品価値も高かったろうが、『羅生門』の死体は身分の低い女だったし、しかも芥川の作中、この死体が着衣をまもっていたかどうかは不明である。申し分なき答である。

では⑥についてどうか。③こそ三品中最も〈商品価値〉が高い。浅野洋の説明は、〈一篇のクライマックスでくどくどした細密描写は確かに禁物であり、下人の所作も（その盗品についても）加速をもとめて煩雑な描写は削除した、という可能性もある。が、前の場面で、老婆の返答の平凡さに失望し、憎悪と〈冷な侮蔑〉を新たに抱いた下人は、老婆の主張する生活論理すら既に〈冷然として〉聞いている。したがって、下人の〈引剝〉行為の意図は、彼の「冷めている」程度にみあうだけ、貪婪な生の中からは離れたところにあった、とは言えまいか。と、なぜ髪を盗らなかつたかの問いを飛びこえ、引剝描写全体の評価に移ってしまう。

私も、下人の引剝が、〈貪婪な生の中からは離れた〉ものとの印象を否定しない。下人の引剝は〈貪婪な生〉の予行演習<sup>④</sup>のように

見える。としても、なぜ下人は髪を盗らなかつたのか。

奇矯に聞こえるかもしれないけれど、私は下人が老婆に髪を与えた、と解する。

これを述べる前に、老婆弁解四を再説しよう。先に加害者側の一方的な思いこみとしての〈許し〉主張と書いたが、さらに言うならば弁解四を give-and-take、贈答論理とみている。

老婆台詞を部分原典『今昔物語集』「太刀帯陣売魚嫗語」と比較すれば、行商女の悪事露見部の削除と、疫病死の付加とが浮上する。作品の方は、老婆が行商女の詐欺を知っているけれども、老婆は行商女を摘発懲罰の方向で一切動かない。〈疫病にか、つて死ななかつたなら、今でも売りに行つてゐたかもしれない〉という本文が、そのことを証す。老婆は行商女の悪をあばかなかつた。生さんがためめ行為として容認した。老婆は行商女に一つの貸しを作つたつもりでいる (give)。〈だから、又今〉老婆が行商女から奪髮する行為 (take) も〈許してくれるにちがいない〉と主張しえた。

この、行商女―老婆の give-and-take を聞いて、今度は老婆―下人の give-and-take が発動する。

下人は老婆の悪事―死体損傷を容認し、髪を奪わせ続ける。 give である。〈では、巴が〉と、自分の悪事にとりかかると。老婆の着衣強奪である。この take も許されるはずだという論理に拠る。

下人の奪衣は、老婆の奪髮の模倣である。give-and-takeの踏襲である。

〔贈与・互酬の原理〕が「世間」の掟の一つであると、阿部謹也は挙げた。老婆弁解四も「世間」入門心得となりうる。

こうして、下人は社会人に変貌する。

〔冷な侮蔑〕も、下人が老婆の処世術にまなんだことを否定するものではない。「侏儒の言葉（遺稿）」の語を借りれば、〔最も賢い処世術は社会的因襲を軽蔑しながら、しかも社会的因襲と矛盾せぬ生活をする事である〕のだから。

## 六

原典最後の一行は、〔此の事は其の盗人の人に語るを聞繼て、此く語り伝へたとや〕である。『今昔物語集』と『羅生門』とを比較した研究は多いけれど、この一行は無縁部分として〔比較の対象から除く〕（藤多佐太夫）<sup>①</sup>流儀がうけつがれてきた。

この一行は原典も無から創造されたオリジナルでなく伝承記録であるとの断りである。そこへ注目すると、芥川にとり示唆的意義をもつ。

芥川は、伝承世界と連続する『今昔物語集』を評価する。その上で、屈託なく自己の換骨奪胎法の駆使に及ぶ。

もともと「羅生門」執筆前の芥川は（オリジナリテート）の欠如に悩んでいた。大正二年七月十七日・三年三月十九日書簡を見よ。「仙人」も、篠塚真木・清水康次が明らかにしたように、アナトール・フランスの模倣を、成立に必要とする。

この点、心中引け目があったにちがいない。にもかかわらず、発表へふみきった一因に、先行作だつて完全なオリジナルでなく、それを非難しない自分は、利用が許されるという思いがあったのではなからうか。

アナトール・フランスの先行作利用創作方法はすでに伝わっていた。<sup>②</sup>芥川はそれをまなび、フランスを取りこんで「仙人」を書いた。説話収集によって成った『今昔物語集』を原典に「羅生門」を執筆した。

下人の give-and-take は、まるでこの喩のようである。

模倣は独創の母、という小林秀雄「モオツアルト」を引くまでもない。芥川自身、後年「僻見」で語っている。

芸術上の理解の透徹した時には、模倣はもう殆ど模倣ではない。寧ろ自他の融合から自然と花の咲いた創造である。模倣の痕跡を尋ねれば、如何なる古今の作品と雖も、全然新しいと云ふものはない。

と。

## 注

- ① 先行研究の総覧を断念して、本稿を書く。できるだけ眼を通そうと心がけはした。文献目録として
- 木村一信 浅野 洋  
三嶋 謙 信編『作品と資料芥川龍之介』(双文社出版、昭和3・3・25)
- 菊池 弘 (芥川龍之介事典) (明治書院、昭和60・12・15)
- 石原千弘 (芥川龍之介) (三省堂、'92・1・25)
- 関口安義 (『羅生門』を読む) (三省堂、'92・1・25)
- 志村有弘 (芥川龍之介『羅生門』作品論集成I) (天空社、'95・11・24) のお世話になった。たまたま気付いた一例ながら、(寺村滋) 項の論者名を木村が(寺島滋)と誤記したら、菊池・石原(P.70上段、13)も関口(P.173 & 16)も志村(P.22 & 1)も一致して同様の誤記をしている。目録作成者ですら現物総覧していないようであるし、遺漏もいくつか出てくるにちがいない。手に負えないと思った次第である。見落としがあれば、非難を甘受する。
- ② 『鑑賞と研究』現代日本文学講座/小説5 (三省堂、昭和37・4・20)
- ③ 『芥川龍之介(その十二)』(昭和27・8・1『文学界』)
- ④ 『文章心理学』(三省堂、昭和10・10・20)。改訂増補版(昭和12・8・30)は解説文に字句修正あり。新稿版(大日本図書、昭和40・9・30)は、保坂の報告どおり、章自体削除され、ライトモチーフに言及しない。
- ⑤ 『芥川龍之介のライトモチーフ技法』(昭和47・9・1『解釈』)
- ⑥ マンガ化された「羅生門」のひとつ、松田一輝「杜子春羅生門」(ぎょうせい、'91・11・15)に、主人公が右頬の突起物へ右手を延ばし人差指で(ポリポリ)と掻くしぐさのコマがある。(面砲を気にし)を掻痒感よりと解したのであろう。この解などは、内容と有機的関連が認められず、採れない。
- ⑦ 「羅生門」の精神分析的解釈 (昭和31・12・30『滋賀大学国語国文学』)。この点以外の寺村論には納得できないところが多い。
- ⑧ 『芥川龍之介の『羅生門』』(昭和40・6・1『解釈と鑑賞』)
- ⑨ 『分析批評入門』(至文堂、昭和42・6・10)
- ⑩ 『芥川龍之介』(有精堂出版、昭和60・2・1)
- ⑪ 『下人の面砲』('87・2・20『国語教室』)
- ⑫ 『芥川龍之介『羅生門』新釈』(昭和56・10・30『山梨英和短期大学国文学論集』)
- ⑬ 『羅生門』論 ('82・5・10『方位』)
- ⑭ この論争についてすでに笠井秋生「羅生門」再読 ('92・3・20『梅花短期大学研究紀要』)の評言があるけれども、笠井が下人の楼上へ上る行為と心理とを切り離す点に疑問を持つので、再説する。
- ⑮ 『奉教人の死』の詩的中心 ('平9・3・31『叙説』)
- ⑯ 『古典と近代作家』(有朋堂、昭和42・4・25)
- ⑰ 『芥川龍之介『羅生門』・『鼻』』(『国語教材』研究講座)高等学校『現代国語』第一巻 (有精堂出版、昭和42・9・20)
- ⑱ 『羅生門』(昭和48・8・15『高校の言語教育』)
- ⑲ 「部分の把握を全体像へ高める短編小説の指導」(大矢武師編『高等学校現代文指導の理論と実践』(明治書院、昭和54・5・5))
- ⑳ 「鬼になったでがす」(石川賢『羅生門』(旺文社、'85・3・12カ))
- ㉑ 『小説の力』(大修館書店、'96・2・20)
- ㉒ 田近洵・鈴木醇爾・三谷邦明・(司会) 関口安義(座談会『羅生門』を読む)('84・8・10『日本文学』)中、三谷が伝える。
- ㉓ 早瀬輝男『羅生門』下人の人物像と主題 ('昭和62・10・1『解釈』)が伝える。
- ㉔ 前注文献の本人論考部

②⑤ 「羅生門」論（関口安義編『アプローチ芥川龍之介』（明治書院、平4・5・30））

②⑥ 内沼幸雄「恥・罪・善悪の彼岸」（昭49・7・5「思想」）に拠れば、対人恐怖症の特長は（①）一般に思春期の頃に発病し、男女比では男性の方がはるかに多く罹患する（最近では女性の患者もふえてきているといわれる）。／②臨床症状としては、赤面恐怖、視線恐怖、自己表情恐怖、醜貌恐怖、体臭恐怖などのさまざまな形態をとる（略）。／③日常の臨床ではよく見られる疾患であるが、一般人口における出現率は不明である（略）。／④（略）欧米諸国とくらべて日本に目立って多いというのが、いまではわが国の精神医学者の一般的見解となっている（というから、今日と基本的には変わっていない）。

②⑦ 「作品」（羅生門）鑑賞（西尾実（他）編『現代国語1 訂版学習指導の研究』（筑摩書房、昭47・2・25））

②⑧ 「羅生門」とゴーゴリの「鼻」の「にきび」について（昭58・3・31「群馬県立女子大学国文学研究」）

②⑨ 「羅生門」論（平元・10・10「常葉国文」）

③⑩ 注①の中の関口著書

③⑪ 森田正馬「自著目録」（野村章恒「森田正馬評伝」（白楊社、74・5・7））所掲〈治療セル強迫観念ノ一例「中外医事新報」明治三十八年三月〉は未見。ここは本文で報じた文献に拠る。ちなみに、後年芥川が森田正馬「神経質及神経衰弱症の療法」を入手し影響をうけたことは有名である。

③⑫ 加害行為の最たるものは殺人である。誰でも殺人を（悪い事）と認める。しかし、これすら条件次第で（悪い事とは思はない）と主張可能であろう。戦争・死刑……。当然絶対悪視の反論が出るけれども。

③⑬ 海老井英次「剥製の白鳥」（九州大学公開講座委員会編『文学のなか

の人間像』（九州大学出版会、昭55・4・10）の（老婆の言い草、それは（悪）に対する悪は許される」という点と（仕方がなくする悪は許される）という「一点に立脚する」や、高橋陽子「羅生門」と「偷盗」（昭55・9・25）『日本女子大学大学院の会誌（会誌）』の（老婆の合理化は二重である。④ここにいる死人たちは悪いである。だから何をされても文句は言えない。⑤自分は盗人にならなければこの情況下、飢え死にする。だから仕方がない）。

③⑭ 「芥川の初期作品における「世間」について」（昭53・9・30『実存主義』）

③⑮ 「羅生門」試論（昭55・3・30『女子大文学』）

③⑯ 「芥川龍之介」（創元社、56・3・25）

③⑰ 「羅生門」攷（昭55・1・20『女子大国文』）

③⑱ 「羅生門」論（昭58・12・15『作新学院女子短期大学紀要』）

③⑲ 「無明の闇」（昭50・4・1『国語と国文学』）

③⑳ 「文学テクスト入門」（筑摩書房、88・3・30）

④① 「あの頃の自分の事」

④② 注③③の中の高橋論文

④③ 「芥川龍之介」（『日本の説話第6巻近代』（東京美術、昭49・3・20））注④④の中の笠井論文がすでに下人の引剥は（盗みを実践するための予行にすぎない）と書いている。

④⑤ 清水康次④⑤が、（原話では太刀帯たちの前に露顕していた行為が、ここでは、露顕することもなく咎められもせずまかり通っていたことに改変されている）と報じている。

④⑥ 「世間」とは何か（講談社、95・7・20）初出未見。

④⑦ 「羅生門」考（昭46・7・1『国語研究』）

④⑧ 「芥川龍之介の創作とアナトーレ・フランク」（成瀬正勝編『大正文学

の比較文学的研究」(明治書院、昭43・3・30)

④9 「羅生門」への過程」(昭57・9・25「国語国文」)

⑤0 「仏蘭西文学と僕」の(早稲田文学の新年号に、安成貞雄君が書いた「フランス」紹介)について、『芥川龍之介全集第七卷』(岩波書店、

96・5・8)の吉田司雄「注解」は、(一九〇九年一月号に載った生方敏郎「アナトール・フランス作『タイース』の記憶違いか」と記す。

私はむしろ、明42年9月之卷に載った安成貞雄「アナトール、フランス英訳書目」の掲載月記憶違いか、と推量する。さて、右書目に〈Anatole France By Georg Brandes [略] 英文のフランス論中、最も出色の文字だ。馬場孤蝶氏が「新潮」で紹介した〉と触れたのが、馬場孤蝶「アナトール・フランス」(明42・4・1「新潮」)である。そこに(アナトール・フランスは、羅旬文学及び仏蘭西の古文学に精通したる学者である。其歴史小説の如きは、隠れたる古代の事実を掘り出して来て使つて居る)と記されていた。

〔付記〕 作品は初出本文、原典は『校註国文叢書』に拠った。字体は厳密でない。